

---

# 僕と君で語る事

荻野斎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕と君で語る事

### 【Zマーク】

Z7828Y

### 【作者名】

荻野斎

### 【あらすじ】

桜の散る季節とでも言えどロマンチックなのだろうが、この話は全くロマンチックではない。全く持つて残酷で、全く持つて傑作で、全く持つて取り返しのつかない話なのだ。だから始めよう。僕とあいつで描く一つの物語を。

## 初ノ語り・ボクノPH（前書き）

いつも、死にかけている男です。よろしければ読んでください。

## 初ノ語り・ボクノモノ

悲しい話がある。

多分それは、僕とあいつが出会わなければ始まる事も無い話だつたんだろう。始まる事も無かつたし、始まつてしまつた今でも、始まるべきではなかつたとしか言つ事が出来ない。

どうして出会つてしまつたのか。

どうしても出会わなければならなかつたんだろう。

あいつとの出会いは偶然でもなく必然、当たり前の事だつたのだ。美德的ではなく悪徳的で。

平穏ではなく不穏で。

優良でなく劣悪で。

有意義ではなく無意義で。自立的ではなく依存的で。

刹那ではなく永劫で。

正気でなく狂氣で。

正常でなく異常だつた。

それは、言つまでも無い事なのだろう。

僕とあいつで繰る、この滑稽な物語は、一生終わる事も無く永遠に続いていく。

きっと、そういう事なのだろう。

だから始めようぢやないか。

あの日は確か、五月の上旬。桜が散り始めるこじゅうど良い季節だつた。

## 壱ノ語り・ボクトオウレイ（前書き）

いつも。納豆を食べたら、その納豆の賞味期限が切れている事に気が付いた奴です。前回の前書きと、同じで繋がるわけです。よろしくれば読んでください。

## 壱ノ語り・ボクトオウレイ

終わり良ければすべて良し。 - シェイクスピア

シェイクスピアも終わり良ければすべて良しなんて言つたけれど、僕からすれば終わらない場合はどうなるんですか、と質問してみたい気分だ。

あの日から僕達は何一つ進んでいなくて、終わりなんて影も見えない。

そんな僕達は、一体どうすれば良い終わりを迎える事が出来るのだろうか。とかシェイクスピアに質問したなら、きっと『そんな事は知りませんねえ』とでも言られてあしらわれるのだろう。

だからどうつて事はないんだけど、僕が思うのはシェイクスピアも終わりが有るような事しかしてないんだなあ、という感想だけである。

それでも僕はシェイクスピアのような偉人を馬鹿にする気など毛ほども無く、むしろ数々の名言を残し、数々の名作を作り上げた彼にはもつと長生きしてほしかった。長生きつてのは、一世紀以上つて事だけ。

でもそう考えると、さすがにシェイクスピアも一世紀以上も生きていたら話を書くのに飽きたりネタに尽きたりして、自己嫌悪に陥る可能性も否めないなあ。

とか、思つたりしたけれど、これは語る必要のない事だ。

語る必要も無いし、語るなんておこがましい事なのだろう。

なんて事を、僕こと、桜磨刀<sup>おうまとうじ</sup>次はハムレットを読みながら思つうのだった。

「シェイクスピア四大悲劇とは良く言つたものだよ。僕の人生の方がよっぽど悲劇的だ」

『かつつかつか。そうに違いないのう。まあ、お主ぐらいの悲劇的な

人生を歩んだ奴は少ないがのう、歩まなかつた奴がいなかつたわけではないぞ。だがしかしお主はすごいのう。大抵、お主のような人生を歩んだ奴は、気でも狂つて終いには自害の道を選ぶがのう』  
妙に爺口調なのは僕の守護霊、桜零おうれい。いや、こいつは悪霊あくれいとでも言つべきなのか。僕の運命を狂わせたという点では悪霊なのだろうけど、これでも一応僕を守つてくれているのだから守護霊と言つべきなのだろう。

「はあ。なんでそういう、僕が鬱になるようなことばかり言つんだよお前は。それじゃあまるで僕が自殺してしまつかのようない方じゃないか」

『そう言つたんじやよ。儂としては生きていて欲しいのじやが、それも無理な話じやろう。人間は一人では生きれぬ生物と聞くからのう。精々持つて一年程度じやろつ』

「馬鹿言え。全部犠牲にしてここまで来たんだ。そう簡単に死んでたまるか」

そうだ。何もかも犠牲にしてきた。

友人も、家族も、恋人も、全てを犠牲にした。その対価で、今僕は生きている。そう簡単に死んでたまるものか。

それに、僕は一人ではない。

「お前もいるしな。良い話相手だよ、桜零は。結構人間の事知つてるしな。話すだけで気が紛れるつてのは本當にある事らしい」

『ふん。儂が仲間になつたとでも思つておるのか？勘違いするなよ。儂は儂のためにしか行動しない。お主が役に立たぬと思ったら切つて捨てるからの』

「捨てられないんだ。もう僕達はそういう風になつちまつたんだから」

『そうじやよ。だから切つて捨てられても良いぐらの覚悟で、この先儂と生きていくと、そう言つておるんじや。儂は儂、お主はお主』

「儂はお主、お主は儂、だろ？分かつてゐる、大丈夫。お前は僕を

恨み、僕はお前恨む。お前は僕を護り、僕はお前を護る。それだけの話なんだろ」「

桜零は、『分かつてゐるなら良い』とだけ言つて、僕の体に戻つた。桜零は守護靈ではある故、普段は人目につかないよう僕の体に身を隠しているが、実態は人型の零なので僕と話す時のみだけ姿を現す。

なんでも、守護靈に限らず、そういう奴はあまり人に見られるとその能力を失うらしい。

人に姿を見られるという事は存在を認識されるという事と同じで、それは靈にとつては危機だとかなんとか。

まあ姿を戻したのはそれだけが理由ではないのだろう。なぜなら、僕達の目的地に辿り着いたのだから。

僕はインターホンを押す。

『は、はい。ど、ど、ど、どなたでしょ』

インターホン越しに聞こえてくる怯えている声。これは相当末期だな、と僕は思いながらこう呟く。

「どうもお、心配いりませんよ。通りすがりの除靈師です。金は一切かかりません。かかるのは」

と、ここで僕は口を紡ぐ。

この台詞はどうも苦手だ。人を脅かす様な口調に、なつてしまふんだよなあ。だがしかし、言わない訳にもいかないだろう。これを言わなければ、僕達の仕事は成立しないのだから。

「貴方の魂を、ほんの少しいただくだけです」

僕が全てを犠牲にして得た力は、除靈の力。ある靈を殺すための、僕の力だ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7828y/>

---

僕と君で語る事

2011年11月23日21時45分発行